

令和六年一月度御講 経王殿御返事

(御書六八五〇一四行目〜六八六〇一行目)

【本文】

日蓮がたましひをすみにそめながし
てかきて候ぞ、信じさせ給へ。仏の御
意は法華経なり。日蓮がたましひは
南無妙法蓮華経にすぎたるはなし。妙
楽云はく「顕本遠寿を以て其の命と為
す」と釈し給ふ。経王御前にはわざは
ひも転じて幸ひとなるべし。あひかま
へて御信心を出だし此の御本尊に祈念
せしめ給へ。何事か成就せざるべき。
「充滿其願、如清涼池」「現世安穩、
後生善処」疑ひなからん。

【背景と大意】

本抄は、文永十(一二七三)年八月十五日、日蓮大聖人が五十二歳の御時、佐渡配流中に認められた御書です。宛名の経王御前は、前年に生まれたばかりで、実際には母親に対する書であると拝せられます。また経王御前は、この時病魔に冒されていて、その平癒の御祈念を大聖人に願ひ出たことに對する御返事です。
内容は、まず御供養の御礼を述べられ、次いで授与の御本尊を固く信受すれば病氣は必ず平癒すると仰せられ、より強盛な信心に立つよう激励されています。特に本日拝読の箇所では、南無妙法蓮華経の御本尊は大聖人の魂そのものであるとして、信じ祈念していくことの大事を教示されています。

【通釈】

日蓮が魂を墨に染め流して認めた御本尊である。よくよく信じなさい。仏(釈尊)の本意は法華経である。日蓮の魂は南無妙法蓮華経に過ぎるものではない。妙楽大師は「(法華経は)顕本遠寿を明かすことを命とする」と釈している。経王御前には、災いも転じて幸いとなるであろう。信心を奮い起こしてこの御本尊に祈念しなさい。何事も必ず成就するのである。「充滿其願、如清涼池」「現世安穩、後生善処」との经文は疑ひないものである。

【主な語句の解説】

妙楽：中国天台宗の第六祖。法華三大部の注釈書を著し、天台大師の法華第一の教えを宣揚した。
顕本遠寿：『法華文句記』の文(法華文句記会本下四八〇)。法華経如来寿量品第十六で、釈尊が久遠五百塵点劫という長遠な仏寿を顕したことをいう。
充滿其願、如清涼池：法華経藥王菩薩本事品第二十三(法華経五三五)の文。「其の願を充滿せしめたもう。清涼の池の(中略)如く」と訓ずる。法華経を持つ者の願ひが叶うのは、あたかも清涼の池が人々の渴きを潤すようなものであるとの意。
現世安穩、後生善処：法華経藥草喻品第五(法華経二一七)の文。「現世安穩にして後に善処に生じ」と訓ずる。現世では安穩なる境界となり、来世にも必ず善き処に生まれて妙法を受持することができるとの意。

○御本尊に具わる意義と功德について

大聖人は、弘安二（一二七九）年十月十二日、出世の本懐として本門戒壇の大御本尊を御図顕されました。

この大御本尊について、総本山第二十六世日寛上人は「弘安二年の本門戒壇の御本尊は、究竟の中の究竟、本懐の中の本懐なり。既に是れ三大秘法の随一なり、況んや一閻浮提總体の本尊なる故なり」（観心本尊抄文段・御書文段一九七）と指南されています。また、第六十七世日顕上人は、この大御本尊と寺院や信徒宅の御本尊との関係について、「どの御本尊様も大聖人一期御化導の究竟たる本門戒壇の大御本尊様が根本となつておられるのであり、その本門戒壇の大御本尊様によって開会せられた御本尊様はすべて、根本の大御本尊様と変わりのない功德が存するのであります」（大日蓮・平成十一年十二月号）と指南されているように、戒壇の大御本尊こそ功德の根源なのです。

拝読の御文に「あひかまへて御信心を出だし此の御本尊に祈念せしめ給へ。何事か成就せざるべき」と仰せのように、私達は御本尊を信受し、真剣な唱題のもと強盛に祈つていくならば、一切の願いを必ず成就できるのです。この意味からも、いまだ御本尊を安置できていない家庭があるならば、一日も早く御安置できるよう努めましょう。

○折伏に挑戦しよう

大聖人は『十字御書』に、「今日日本の法華経をかたきとして、わざわいを千里の外よりまねき出だせり。此をもつてをもうに、今又法華経を信ずる人はさいわいを万里の外よりあつむべし」（御書一五五一）と仰せです。正法を受持し折伏に精進する私達の信心によつて、国土に幸いをもたらすことができるとの御教示です。

私達は、今まで以上に御本尊を固く信じて唱題に励み、自身の成仏はもとより、大聖人の御遺命である広宣流布達成のため、本年こそ全講員が立ち上がり、勇猛果敢に折伏に挑戦してまいりましょう。

○日如上人御指南

御法主日如上人猥下は、「もし、折伏が思うようにできなければ、相手の強情さを嘆くのではなくして、自分自身の信心の弱さ、題目の足りなさ、信心の現証体験の足りなさを反省し、真剣に唱題に励み、御本尊へ祈り（中略）折伏を続けていくことが肝要であります」（大日蓮・平成二十四年九月号）と、人は、とかく理屈では解つていても、愚かな欲望や懶惰懈怠（らんだけだ）の悪しき縁に誑（たぶら）かされて、大事な時間を無駄にし、挙げ句の果てに、一生を虚（むな）しく過ごしてしまうことが多々あります。こうした懦弱なる命を強靱な命に変えていくことができる唯一の道こそ、大聖人様の仏法であります。正しい御本尊のもとに、確信を持つて信心をしていけば、広大無辺なる御本尊の功德によつて（中略）煩惱を断つこともなく、五欲を離れることもなく、同じ欲望であっても、邪（よこ）まな欲望から正しい欲望に変革していくことができるのであります。この心の変化は、ただ、正しい御本尊様への絶対の確信と、身口意の三業にわたる強盛なる信心によつて初めてかなえられるのであります。

（大日蓮・令和五年十二月号）

* 「梁塵秘抄」は平安末期保元二年から治承三年後白河法皇により編さんされた今様を中心とする歌謡集です。

書題の「梁塵」は梁の上に積もった塵の事 魯の国に虞公という美声の歌手が「たび歌うと人間はもとより梁の上に積もった塵も感動して舞い上がったといひます。この故事からすぐれた歌謡や音楽をたたえて” 梁塵を動かす”と表現される。「秘抄」の秘は奥深いことの形容で抄は抜き書きの意とある。

今様は平安後期に流行した歌謡でその当時流行した歌謡である。

* 法華経八巻は一部なり 二十八品何れをも 須臾しゅゆの間も聴く人の 仏に成らぬは無かりけり

* 法華経このたび弘めむと 仏に申せど許されず 地よりいでたる菩薩たち その数六万恒沙ろくまんじょうがしゃなり

* 法華経八巻は一部なり 二十八品そのなかに あの 読まれたまふ 説かれたまふ壽量品ばかり あはれに尊きものはなし

* 仏に華香はなこうたてまつり 堂塔建つるも尊しや これにすぐれてめだたきは 法華経持たもてる人ぞかし

平安末期は 正・像・末 の三時からはいすと、末法の始まりの二百年前頃と言われています。

この当時の人々の教養は、今時の我々より、知的であったとおもふ。